様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 7 月 31 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２００５１
研究課題名（和文）　近現代宗教論における「生の宗教」の系譜をめぐる時代比較的研究

研究課題名(英文)　Comparative Studies of the “Religion of Life” in modern and contemporary religious Discourses

研究代表者
深澤　英隆(FUKASAWA HIDETAKA)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：30208912

研究成果の概要：
本研究は、近代ヨーロッパ社会において、神に代わって人間の「生」そのものを究極的な価値とするような宗教性のあり方が台頭したことに注目し、その広がりと時代的変遷を探る試みであった。本研究では、こうした宗教性を「生の宗教」と名づけ、19 世紀末から今日に至るドイツ宗教史・文化史を事例として、その系譜を跡づけた。その結果、生の宗教性が 20 世紀の宗教史のひとつの基調をなしていたこと、同時に時代によって小さからぬ変化があったことが、明らかとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,000,000	0	1,000,000
２００７年度	900,000	270,000	1,170,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	450,000	2,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：生の宗教、ドイツ民族主義宗教運動、フィドゥス、ファーレンクローク、ジンメル、自然宗教、内在主義

１．研究開始当初の背景

近代社会がいわゆる世俗化社会と言われながら、他方では宗教や宗教的なるものが全く失われたわけではないこと、むしろ制度的宗教の枠外でさまざまな現象形態をとって存続して来たことは、誰もが認めるところである。しかしこれまでの宗教研究は、伝統宗教や組織的・制度的宗教に主たる感心を注いできたこともあり、こうした制度外の流動的でしばしば不定形な宗教現象を概念化することを十分に行ってこなかった。本研究では、そうしたこれまでの研究史では捉えきれなかった宗教性を把握するための鍵として、「生の宗教」という概念を案出した。近代宗教の特徴のひとつは、超越主義の後退と反比例するかのように、此岸の諸価値に宗教的意味が付与され、そうした内在的なものが超越性の機能的等価物となる点にある。「生」もまた、そうした機能を果たした概念である。この「生の宗教」という概念を用いて、これまで関連づけられることもないままでいた

宗教・文化現象を統一的な視点のもとにおき、そのうえで現象相互の、また時代的な差異を見届けることを動機として、本研究は開始された。

２．研究の目的

本研究の目的は、大きく見れば、近現代宗教に固有の一特徴、すなわち超越ならぬ内在的なものを志向対象とする宗教性を把握し、近現代の宗教についての理解を深めることにあった。

より具体的には、大きく分けて、二つの研究目的を設定した。

(1)近現代ドイツの宗教・文化状況をフィールドとして、生の宗教の現象形式を検討する。具体的な材料としては、19 世紀末から 20 世紀にかけての生活改革運動および民族主義宗教運動に見られる宗教性を検討する。さらに生の宗教思想を代表するとも言える、ゲオルク・ジンメルの思想を、生の宗教という観点から再考する。

(2)生の宗教の時代による変遷を比較により明らかにする。この目的のために、ドイツ民族主義宗教運動の一世紀における変化を、両時代の教団の比較により解明する。またこうした比較を通じて、ひとつの普遍的類型概念としての「生の宗教」の一般的特徴を明らかにし，更なる比較研究のための理論的土台を準備する。

３．研究の方法

研究の方法は、主として二つの形をとった。

まず歴史的過去の運動体および思想内容に関しては、文書資料によった。刊行された図書および雑誌のみでなく、公刊されなかった草稿類や運動体の内部資料なども、ドイツにおいて幅広く収集し、参照した。資料収集先は、ベルリン市立図書館、ベルリン・ギャラリー文書部、ドイツ青年運動資料館、ニュルンベルク・ゲルマン国立博物館などである。さらに現代の運動体に関しては、文書資料のほかに、インターネット上に設けられているサイトや掲示板をも資料として、分析の対象とした。

４．研究成果

研究成果は、研究目的に応じたかたちで、大きく二つに分けることができる。

第一は、歴史的過去の思想および運動に関わるものであり、第二にはその現代における現象形態および過去と現在の時代比較に関わる成果である。

(1)歴史的過去の運動および思想に関わる成果は、二つの大きな主題に分けることができる。

①第一に、19 世紀末から 20 世紀にかけての生の宗教運動とも言うべきものを跡づけ、生の宗教性がいかに生きられたかを解明した。その際の対象としてまず注目したのが、いわゆる「生活改革運動」(Lebensreform-bewegung)であった。「生」(Leben)の語を冠したこの運動は、独自の生／生命／生活思想とそれに基づく実践を行った多様な運動体の集合からなっていた。ドイツ文化史上非常に多面的な影響力のあった事象であるが、これまで十分な研究の対象となって来たとは言えない。ドイツでは、特定の運動方向については、ある程度の研究の蓄積があるが、この生活改革運動の宗教性については、これまでごくわずかの研究論文があるのみであった。日本においては、生活改革運動自体がなおほとんど研究されていないのが現状である。こうした研究状況のなかで、本研究では、生活改革運動のシンボル的存在とも言える画家フィドゥス（Fidus、本名 Hugo Hoeppener）とその運動体にまず焦点を当てた。Fidus は、戦前期のドイツでは著名な、ユーゲントシュティル（アールヌーボー）を代表する画家・イラストレーターであるとともに、菜食主義運動、動物愛護運動、服飾改革運動、裸体運動その他の生活改革運動と深い結びつきをもち、そうした諸運動の交点にいた。またフィドゥスは、独自の神秘主義的な宗教ヴィジョンと宗教思想をも抱き、さらに「聖ゲオルク・ブント」なる共同体をも率いていた。本研究では、この本国のドイツでも忘却された存在であるフィドゥスにおける生の宗教の様相の解明に努めた。ドイツにおける資料収集の過程で、宗教的ヴィジョンに関わるフィドゥスの未公刊の草稿類を数多く発見した。その読解を通じて、フィドゥスの抱く宗教的ヴィジョンが、キリスト教的超越主義を否定し、自然的かつ内在的生に究極的な価値と救済の根拠を置き、その意味で自然的生にある種の超越的性格をも付与するような性格のものであることが了解された。またフィドゥスの多くの作品群と、フィドゥス自身によるその解説草稿や宗教文書などを比較照合した結果、フィドゥスの絵画や挿画などに生の宗教の理念が造形化されていることが確認された。のみならず、関連資料を分析するうちに、生活改革運動全体における視覚文化の重要性と、そのなかでのフィドゥスの決定的な影響力ということも明らかになってきた。近年英語圏では、宗教信仰と視覚文化・モノ文化との関連をめぐる研究が進んでいる。そこではまだフィドゥスには全く注目がなさ

れていないが、フィドゥスとその作品は、この新しい理論的動向のなかで取り上げるに十二分に価すると考えられる。そこでこの観点からも、フィドゥスの作品世界を分析した。フィドゥスについては既発表の論文のほか、2009 年度中になお一論文（「ファシズムと宗教的プレファシズムの『拒絶』―フィドゥスの事例」）が、共著の一部として活字になる予定である。

フィドゥスと並んでこの分野での成果として挙げうるのは、L・ファーレンクローク(Ludwig Fahrenkrog)とその「ゲルマン信仰共同体」の分析である。すでにフィドゥスの思想と作品においても民族主義的色彩は色濃かったが、フィドゥスと同様画家でありイラストレーターであったファーレンクロークは、当時のドイツ民族主義宗教運動の代表的グループであるゲルマン信仰共同体を創立し、活発な活動を行った。当時の民族主義宗教運動については、ドイツでも 90 年代から徐々に研究が現れ始めたが、なお基礎データの収集も満足になされていないのが現状である。ファーレンクロークについても、研究はほとんどなされていない。本研究では、ファーレンクロークの遺稿資料をドイツにおいて閲覧・収集し、やはり生の宗教という観点から、その思想と運動体を特徴づけることを試みた。ファーレンクロークもやはり生活改革運動と深い関わりをもっているが、その生の思想は、民族的生＝民族的自然の理念と分ちがたく結びついていた。ファーレンクロークにおいても、生の概念はキリスト教的超越概念の反対物として構想されていたが、同時に民族的生を内的に生きることは、キリスト教のそれに代わる救済をもたらすものと考えられていた。ファーレンクロークの場合は、その数多くの著作と、また遺稿のかたちで残されていた原稿類から明らかなように、明確な宗教理解と宗教史理解をもっていた。それによれば、人間の宗教的世界理解は、古代から現代に至るまでに進化をとげている。古代宗教、とりわけゲルマン宗教は生への宗教的崇敬を抱いていたが、自然的生を貶めるユダヤ=キリスト教が歴史に登場して、宗教史は大きく後退した。これに対してドイツの地では中世のドイツ神秘主義思想から宗教改革を経てドイツ観念論に至る精神史のなかで、キリスト教的超越主義を克服し、人間とその生を再び究極的な実在とする思想が復活してきた。ことにキリスト教的な個人主義的救済論に代わって、ドイツ国民主義の理念が再び集合的・民族的生の救済論的意味を再発見した。ファーレンクロークはこうした歴史理解のうえに、自らの宗教運動のヴィジョンを位置づける。本研究では、まずこうしたファーレンクロークの宗教的ヴィジョンが、過去のドイツ精神史の「解釈的同化」による再構成により基礎づけられるプロセスを解明した。この問題については、現在印刷・校正中の共著論考「ドイツ・フェルキッシュ宗教運動における宗教史理解―「ゲルマン的信仰共同体」の事例」において明らかにした。また一次資料の再構成により、ゲルマン信仰共同体の儀礼的側面や共同体規約を分析して、そこに生の思想がいかなる形で反映されているかを解明した。この作業は、以下にふれる時代比較の作業のための土台ともなった。

②歴史的過去に関わる研究の第二の主題は、生の宗教の思想的展開の解明であるが、これについては 20 世紀に入って以降のドイツにおいて流行をみた「生の哲学」の代表的存在であるゲオルク・ジンメル(Georg Simmel)の宗教理解の分析を試みた。ジンメルの思想については内外に相当量の研究蓄積があるが、ジンメルの宗教論については、極めて限られた数の研究業績しかない。これは宗教を論じるジンメルのテクストが難解かつ両義的であることにもよるが、これまでの内外の研究がジンメルの宗教論を同時代の宗教状況のなかで検討しなかったことに起因している。そこで本研究では、ジンメルの同時代の宗教状況、とりわけキリスト教の影響力の衰退と世俗化の様相、および新たな宗教運動の展開を跡づけることにより、これまで未解明だったジンメル宗教論の含意を明るみにだすことを試みた。その結果明らかになったのは、ジンメルの一連の宗教論が同時代の宗教状況というコンテクストを背景としており、それによって強く動機づけられていたとの事実である。ここで重要な点は、ジンメルの生の思想は、同時代の生の宗教の諸運動と、生の内在性に究極的価値を置くという点で一致しながらも、ジンメル自身は同時代の生の宗教の諸形態に対して強く批判的な立場に立っていたとの事実である。ジンメルのテクストを仔細に分析してゆくと、ジンメルの生の哲学の基礎概念である生と形式という対立概念が同時代の宗教運動に適用されていること、そこでは最終的にいかなる形式化（実定宗教化）をも超越する生の不定形なダイナミズムが重視されていることが明らかとなった。また最晩年のジンメルの生の思想は、同時に死および不死性についての思想と切り離し得ないこと、その際ジンメルが諸宗教の不死思想を比較検討し、思考実験のようにして独自の不死性の思想にたどり着いていたことを解明した。これについては学会発表を行ったが、これに基づく論文「生の形成者としての死―ジンメルの死／不死性論」が，共著論文として 2010 年度に活字になる予定である。

(2)生の宗教の時代的変遷と一般概念としての解明については、以下の成果を得た。

まず時代比較については、生の宗教の実践や思想そのものが多様であるために、問題をしぼる必要があった。そこで、歴史的過去の事例として詳しく検討した「ゲルマン信仰共同体」が現在も同名で存続していることに着目し、過去と現在の共同体としてのあり方を比較検討した。現在の共同体については、同集団の刊行物のほか、共同体のホームページに付設されている掲示板への膨大な書き込みを分析の対象とした。その結果、とりわけ以下のような時代的変遷が確認された。旧共同体は、強く「知識人宗教」に傾き、ゲルマン神話についても脱神話化の方向で理解しており、また思想においても儀礼に用いるテクストに関しても、哲学的抽象度の高いもの（ドイツ観念論、ドイツ神秘主義等）が好んで用いていた。これに対し、現在の共同体は、抽象的思想にはほとんど関心を抱かず、むしろ神話・伝説のモチーフや形象を享受する傾向にある。また旧共同体が明確な民族主義・人種主義的な生の思想にもとづく、凝集性の高い集団を形成していたのに対し、現在の共同体は、表向きは民族主義を排して、グローバルな自然宗教・ネオ異教主義運動に連帯している。また旧共同体は明確な男性同盟的な性格をもち、幹部はすべて男性で占められていたのに対し、現在の共同体では、幹部層においても一般会員においても、女性の関与の度合いが高い。

一方、こうした一連の相違にもかかわらず、キリスト教的救済論に代えて、自然的生に究極的な救済根拠を置くという点では、新旧両者の共同体は軌を一にしている。この意味で、生の宗教としての連続性をそこにうかがうことができる。生の宗教の概念を一般概念として確立するためには、さらなる時代および地域比較が必要であろう。生についての理解も、他の諸事象と生との関連についての理解も、時代と地域によって多様なはずだからである。とはいえ、近代性の基本傾向が、人間とその生の前景化にあるとするならば、生の宗教を、近代以降のグローバルな宗教性の一動向として想定する事は許されるはずである。本研究の成果は、何よりも事例研究を通じて近現代宗教の解明に関してこうした見通しを得たことにあると言えよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

深澤英隆、異界としての建築―フィドゥスの「神殿芸術」の構想、細田あや子・渡辺和子編『異界の交錯』下巻、2006、447-464 頁、査読：無

〔学会発表〕（計３件）

①深澤英隆、ドイツ民族主義宗教運動における「解釈的同化」の問題、日本宗教学会第 67 回学術大会、2008 年 9 月 14 日、筑波大学
②深澤英隆、「知識人宗教」の概念の生成と射程、日本宗教学会第 66 回学術大会、2007 年 9 月 16 日、立正大学
③深澤英隆、生の形成者としての死―ジンメルの死／不死性論、日本宗教学会第 65 回学術大会、2006 年 9 月 17 日、東北大学

６．研究組織
(1)研究代表者
深澤　英隆(FUKASAWA HIDETAKA)
一橋大学・大学院研究科・教授
研究者番号：30208912